

# 戦前・戦中期の天津における 日本人の社会教育に関する一考察 —天津日本図書館の教育活動を中心に—

李 雪

キーワード：天津日本図書館、社会教育、日本人学校、居留民団、天津日本租界

【要 旨】本研究は天津日本図書館の事例を通して、戦前・戦中期において、日本の海外における展開された社会教育の実態、及びその役割を考察するものである。

本研究は主に第一次史料として、①天津日本居留民団年度事務報告（1907年-1944年）、②早稲田大学学報、③アジア歴史資料センター所蔵の資料、④『天津日本図書館館史資料匯編』シリーズを参考文献とする。

天津日本図書館は1905年に会員組織として発足した。早期開館した同館は天津日本租界の日本居留民に活発に利用され、40年間存続していた。

同館は創立当初、早稲田大学による寄贈書籍を受け、これを基礎として発足した。また、評議員に学校関係者が多かったため、同館は天津の日本人向けの諸学校と緊密な関係を持ち、学校教育を補足する機能が備わっていたのである。

また、社会教育の視点から同館の役割を考察してみた。まず、日本を理解する場である。「外地」天津において、日本の印刷物の入手が困難であったため、同館は配慮し、多様かつ豊富な新聞雑誌を収集し、整備したことで、居留民にとって母国の事情を理解する場となった。次に生涯教育の場である。同館は巡回文庫の開設によって、天津の日本人青年たちに学び続けられる場を提供した。3つ目は日本居留民どうしの交流を促す場である。同館は講演会、座談会、展覧会を開催し、天津の日本居留民に気軽に交流しあえる機会を提供した。中国の文化・歴史の理解を深め、そして戦時下において日本精神を宣揚する効果があった。最後は学校教育の充実をはかる場である。同館は児童図書館を新設し、また山海関臨海学校の夏季文庫や天津諸学校合同博物採取などの実践活動を行い、学校教育を補う役割を果たした。

今後の課題として、「外地」における他の居留民団立図書館との比較研究をし、天津日本図書館の特徴を明らかにしたい。

## 1. はじめに

本研究は天津日本図書館の事例を通して、戦前・戦中期において、日本が海外に展開してきた社会教育の実態、及びその役割を考察するものである。

天津日本図書館は1905年に会員組織として発足した。早期開館した同館は天津日本租界の日本居留民に活発に利用され、40年間存続していた。

天津の日本租界は1898年「天津条約」によって規定された日本専管租界である。1900年義和団事変勃発後、天津に移住する日本人は日本租界を中心に暮らしており、人数も年々増加していっ

た。日本居留民の増加とともに、教育問題は在天津の日本人有識者に特に注目されるようになった。

1902年に私立学校として発足された天津日本小学校は天津において日本人教育の端緒であるが、中等教育機関の整備が出遅れていた。1921年によく日本人女学校が増設されるようになった。男子中学校や商業学校などが設置されたのは1930年代であった。中等教育機関の設置されるまで、天津の日本居留民の子弟にとって、小学校卒業後、進学意欲のある生徒は日本に帰国するか、上海、青島などの居留民団立の中学校に入学せざるを得なかった。

一方で、卒業後天津に就職した生徒が、知識を獲得したり、深く研究したりするために、社会教育機関は重要な役割を果たした。社会教育機関として、戦前・戦中期における天津では、天津日本図書館と天津日本教育博物館<sup>1</sup>が挙げられる。本研究は天津日本図書館を取り上げる。

天津日本図書館に関する中国側の先行研究には、同館の蔵書に焦点を当て、満鉄資料、地方歴史資料、文学歴史参考書などに関する紹介がある<sup>2</sup>。日本側の先行研究において、桂川光正により天津図書館「日本文庫」<sup>3</sup>、「日本文庫目録データベース化事業の概要」<sup>4</sup>を紹介した。また、山根幸夫（1997）<sup>5</sup>は天津図書館撰「天津日本図書館の概況」の訳文を掲げ、『天津居留民団20周年記念誌』、『天津居留民団30周年記念誌』の関連記事・統計データを引用しながら、説明を加えた。さらに、米井勝一郎（2000）<sup>6</sup>は『天津日本図書館館史資料匯編』<sup>7</sup>に関連資料を利用し、同館の歴史を再構築し、40年にわたって活動を継続することができる要因を考察した。

先行研究を概観し、天津日本図書館は天津に在住する日本居留民の支持から、設置し存続されていたことがわかった。しかし、先行研究は、同館の歴史沿革、組織変更、利用者数、蔵書、利用規則、及び活動などに関する概況的な紹介にとどまっており、教育文化施設である図書館としての社会教育の視点が欠けている。

本稿の研究目的は、天津日本図書館の社会教育においていかなる役割を果たしたのかにおかれる。具体的には、まず先行研究の成果を援用しながら、同館の歴史沿革をさかのぼり、そして、先行研究に言及されていなかった同館の草創期歴史を再構築し、図書評議員を担当していた学校関係者を分析する。次に、社会教育の重要施設である図書館として、どのような教育活動を展開し、いかなる効果を挙げていたのかを考察し、戦前・戦中期において、「外地」に展開された社会教育の実態、及びその役割を明確にする。

本研究は主に第一次史料として、①天津日本居留民団年度事務報告（1907年-1944年）、②早稲田大学学報、③アジア歴史資料センターが所蔵する資料、④『天津日本図書館館史資料匯編』シリーズを参考文献とする。

## 2. 天津日本図書館

### 2.1 天津日本図書館の沿革

天津日本図書館は1905年8月に、天津日本人倶楽部に会員組織としてスタートした。設立された当初には会長として天津日本総領事であった伊集院彦吉が就任し、20名の図書館評議員が置かれ、図書館に関するすべての事務を処理した。館名は「清国天津日本図書館」であった。

1907年9月に天津日本居留民団が設置された際に、同館は居留民団に引き継がれて、居留民団立図書館となった。1913年11月に民団事務所及び公会堂が新築された際に、同館も日本租界の大

和公園に新築されることになった。しかし、天津日本居留民の増加、及び同館の発展に伴い、同館は次第に狭隘化されつつあった。1928年9月、御即位御大典記念事業として図書館新築案は居留民会において決定し、建築基金を積立てた。

1931年7月、財団法人天津共益会が設置され、同館は居留民団から天津共益会の経営に移された。1934年に三昌洋行主の岡山久雄は皇太子殿下御降誕記念として御大典記念事業促進のため、図書館新築基金として2万円を寄付した。1934年7月大和公園に図書館の新築工事を起こし、1935年6月新築竣工式が行われた。規模拡大による活用の利便性が求められた。

1937年7月中戦争勃発後、天津に移住していた日本人がさらに増加してきた。特に児童生徒数が増えていたため、1939年2月に児童図書館は設立され、子どもの閲覧に供することとなった。このことは、図書館が子どもの学校教育、家庭教育、社会教育など領域横断的学習、総合的な学習につなげていくための存在価値があることが考察される。

また、同館は戦争をめぐって、様々な教育活動が行われていた。1940年11月、同館の付属事業として天津読書会は発足し、中国の歴史、地理、宗教を中心に講演会と座談会を開催した。1941年7月より、巡回文庫が設置され、同館に通う不便な組織は申請によって、巡回文庫を設置することができるようになった。1945年に敗戦によって、同館は閉館された。同館は1905年開館から閉館まで、40年にわたって存続していた。

## 2.2 草創期の天津日本図書館と早稲田大学

『天津居留民団10周年創立記念誌』（1917年）、及び『天津居留民団20周年創立記念誌』（1927年）において、同館の創立に関する記録が残された。つまり、日露戦争後、天津において日本人有識者の間に、図書館を創立すべきといった声が高まったことに起因する。同館は会員制として発足され、「会員は毎月五十仙の会費を納むると共に図書の閲覧は無料其会員外は有料とし」<sup>8</sup>た。

しかし、同館は創立当初の蔵書についての関心と知見がなく、先行研究はあまり言及されていなかった。同館の草創期においては早稲田大学が深くかかわっていたのである。1905年、早稲田大学（当時東京高等専門学校）学監高田早苗は、3ヵ月に渡って、中国各地を訪問した。訪問期間中、高田は天津に立ち寄り、天津日本倶楽部で講演を行い、書籍を寄贈した。同館は、寄贈された書籍を基礎としてスタートした。その詳細は当時天津日本居留民団行政委員会議長代理者小松林蔵より高田に送信した手紙<sup>9</sup>に詳細に記録された。

近頃は追々青年者も来津する者多く又兵士などは日曜水曜の休日をも有益に消費するの機関無之（殊に郊外の興味なき土地故）為に有志者は図書館の設立計画致居候得共何分資本を要する事故延引致居候処今回の御寄贈書籍を根基として別紙規則の通り図書館成立致候就ては該書籍は日本図書館に御寄贈被下事に御快諾願度引継ぎ御寄贈の講義録も「天津日本倶楽部内図書館行」と御発送方御取計り願上候、弘く本邦書籍出版業の寄贈を仰ぎ多数蒐集致候……

以上の内容から、早稲田大学から寄贈した書籍と講義録をうけたことが分かった。また、1908年の寄贈リスト<sup>10</sup>には、早稲田大学出版部より「法律科 明治四十一年二学年 20冊」、「大学

科 同 19冊」、「政治経済科 同 18冊」、「商業科 同 17冊」、「清語部 政治理財科 5冊」、「商業科 一学年 7冊」講義録計86冊、1909年に同大学出版部より「商業科講義録 四十一年度 二学年 7冊」「同 四十二年度 一学年 17冊」計24冊、1910年に早稲田大学出版部より「商業科 四十二年度一学年 7冊」、「商業科 四十三年度二学年 17冊」講義録計24冊<sup>11</sup>の寄贈記録が残っている。

## 2.3 同館の教育関係者である評議員

同館は、創立当初から評議員制度が設けられていた。評議員を担当した人物には、学校関係者の名前がしばしば登場する。本節では、図書館の評議員制度、及び評議員を担当した教育者について考察する。

評議員制度について、具体的には、『日本図書館規則』（1905年）<sup>12</sup>の記載が注目される。

第八条 本館は会長一名、常置員三名、評議員二十名を置く

第九条 本館役員の任期は一ヵ年とし毎年大会の際会長評議員は全会員中より選挙し、常置員は評議員の互選を以て之を定む

第十条 会長は本館諸般の事務を総理す

常置員は本館の庶務を処理し会計を掌る

評議員は本館の事務に関し必要の事項を決議す

以上の規定がなされていた。すなわち、会員制図書館として発足した同館は、会員自治という方針で、会員から評議員を20名選抜し、また評議員から常置員と会長を選挙し、図書館の庶務、会計などの事務を管理・運営させることとなった。

また、1911年改正された「日本図書館規則」<sup>13</sup>では、以下の記載がある。

第七条 本館に評議員三名を置き行政委員会之れを囑託す評議員は本館管理者を協議し書籍の購入其他本館に関する庶務を処理す

第九条 評議員は毎年一月前一ヵ年の事務の経過並に会計を行政委員会に報告すべし

1907年に同館は会員制から居留民団立に組織変更されたため、新たに改正された図書館規則では、評議員制度が引き続き存在したが、会員から選抜されるのではなく、行政委員会によって委託される形になった。なお、「多数評議員の囑託上困難を感ずる」<sup>14</sup>を理由に、評議員を3名設置するようになった。また、評議員の職務としては、「書籍の購入」という内容が明確に規定されていた。さらに、1916年に、評議員の人数は3名から5名に変更した<sup>15</sup>。

1926年に評議員に関する規則はまた変更され、図書館の館務を全般的に担当した「主任」<sup>16</sup>という職が置かれた。主任の設置によって、評議員は従来の図書館事務の管理より諮問の役割に転換した。

どのような人物が同館の評議員として任命されていたのか。実例として、1905年から1911年ま

での評議員に選ばれた人々に、「総領事、民団の行政委員や行政委員会長・民団理事長に主任した名前を確認することができる」<sup>17</sup>とあり、その他、教育関係者にも多数確認された。表1がわかるように、その時期の同館の評議員には、日本人教習が中心となっていた。

表1 日本人教習である天津日本図書館の評議員（1905年-1911年）

評議員	所属（任期）	評議員としての任期
渡辺龍聖	直隸省学務処顧問 直隸師範学堂総教習 (1902年-1909年8月)	1905年-1909年
藤井恒久	北洋工芸学堂総教習 (1902年7月-1909年7月)	1905年-1910年
三浦喜傳	天津警務学堂総教習 (1902年5月-1910年5月)	1905年-1910年
平賀精次郎	北洋軍医学堂総教習 (1902年11月-1910年4月)	1905年-1910年
中島半次郎	北洋師範学堂総教習 (1906年9月-1910年1月)	1907年-1909年 (1907年-1909年常置委員)
小幡勇治	天津兩級師範学堂 (1905年4月-1911年)	1907年-1911年 (1907年-1911年常置委員)

出典：「清国天津に於ける日本図書館」早稲田学報第124号、1905年10月  
「天津日本居留民団事務報告」（1905年-1911年）より、筆者作成

なぜその時期、同館の評議員には日本人教習が多いか。同館の創立当初の1905年ごろには、日本人教習の最盛期にあたり、特に1902年から1910年にかけて、天津の各学堂に教鞭を執った日本人教習は60余名であった。表2に示したように、当時新式学校に数多くの日本人教習が招へいされた。

表2 天津における主な学堂の日本人教習の状況（1902年-1910年）

学堂名	日本人教習人数	学堂名	日本人教習人数
北洋師範学堂	14名	北洋法政専門学堂	11名
天津警務学堂	8名	北洋軍医学堂	8名
天津工芸学堂	5名	天津兩級師範学堂	4名
嚴氏家塾	4名	その他	7名

出典：中島半次郎『日清兩國間の教育関係』1910年；『北洋師範学堂彙編』付録1-16頁（出版年代不詳、1909年-1910年と推測）；『清国お雇い日本人』汪向荣著、浅野純一等訳、朝日新聞社、1991年、95-98頁；『天津近代教育史』張大民、天津人民出版社、1993年、104-105頁より、筆者作成

1910年以降、日本人教習は雇用期間の関係で、相次ぎ帰国することになったため、同館の評議員を嘱託された日本人教習が1910年頃、ほとんど辞任した。それ以降は、評議員を担当した教育関係者として、表3に示しているように、日本人に経営された学校の校長が多くなった。



表3 学校長である天津日本図書館の評議員（1910年-1944年）

評議員	所 属	評議員としての任期
三輪辰次郎	天津日本小学校校長	1910年
鈴木傳一郎	天津日本小学校校長	1911年-1920年
植松伊八	共立小学校校長	1917年
矢澤千太郎	共立小学校校長	1920年-1934年
星野四郎	天津日本小学校校長	1920年-1932年
藤江真文	天津中日学院総務長	1923年-1934年
篠原茂嘉	天津日本高等女学校校長	1935年-1937年
崔瑯淳	天津日本商業学校校長	1935年-1938年
山城静徳	天津日本小学校校長	1935年-1937年
丸山英一	天津日本中学校校長	1938年

出典：1910年-1944年天津日本図書館の年度事務報告書より、筆者作成

以上のように、同館の評議員には、教育関係者が多く存在しており、図書館の日常事務管理から図書購入まで担当していた。したがって、教育関係者は図書館の運営にかかわり、学校側の要望を図書館側に届けることが考えられる。そして、図書館の運営や活動の方針は、天津における日本人学校の要求に応じて実施した可能性が高いことが窺える。一方、同館は社会教育の主要施設として、学校教育者が日常運営に携わることによって、学校教育を充実させる機能も備わっていると思われる。

## 2.4 同館の蔵書

### (1) 蔵書の数量

山根(1997)<sup>18</sup>は、同館の蔵書状況について、3段階に分けることができると言及していた。第1期は1905年創館から1924年まで、蔵書の基礎建設期であった。年間増加率は200冊前後で、増加率はそれほど大きくなかった。第2期は1925年から1930年まで、5年間で蔵書が1924年の6,000余冊から1930年の12,000余冊に2倍増加した。その時期は蔵書が需要・供給にともない、急速に発展していた段階であった。第3期は1931年から1944年まで、蔵書の数・内容が最も充実した時期であった。その時期に、年間の新增書数はほとんど千冊前後であり、同館の閉館時に蔵書数は8万冊に及んでいた。

同館の蔵書状況は表4の通りである。

### (2) 蔵書の内容

天津日本図書館蔵書に関する先行研究として劉(2000)<sup>19</sup>は、次のように言及している。

蔵書は日本語文献と欧文文献を中心とした。日本語文献には、「哲学類2,700巻、歴史類5,700巻、言語類1,100巻、文学類8,200巻、芸術類1,100巻、その他の社会科学類1万巻、自然科学3,300巻、工学類1,000巻、産業類2,800巻、その他1,600巻」<sup>20</sup>がある。日本語文献の総量からすれば、人文科学の蔵書が28,800冊であったのに対して、自然科学の蔵書は7,100冊で、人文科学のわずか四分の一しか占めていなかった。また、それらの蔵書の中には、中国に係する書籍が多くて、その

表4 天津日本図書館蔵書状況（1905年-1944年）

年度	蔵書総数	新增書数	年度	蔵書総数	新增書数
1905	不明	不明	1925	8,100	1,450
1906	不明	不明	1926	9,007	907
1907	1,865	不明	1927	10,145	1,138
1908	2,692	827	1928	10,843	698
1909	2,941	249	1929	11,748	905
1910	3,234	293	1930	12,644	896
1911	3,296	62	1931	13,609	965
1912	3,568	272	1932	15,834	2,225
1913	3,647	79	1933	17,925	2,091
1914	3,803	156	1934	20,465	2,540
1915	4,140	337	1935	23,634	3,169
1916	4,622	482	1936	25,644	2,010
1917	4,831	209	1937	26,893	1,249
1918	4,921	90	1938	28,148	1,255
1919	4,984	63	1939	31,985	3,837
1920	5,184	200	1940	39,314	7,329
1921	5,409	225	1941	48,143	8,829
1922	5,657	248	1942	58,809	10,666
1923	5,900	243	1943	68,338	9,529
1924	6,650	750	1944	81,265	12,927

出典：1905年-1935年は「財団法人天津共益会事業概況」前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）313頁、1936-1938年は「行政概要」同336頁-337頁、1939年は「昭和14年事務報告書」同359頁、1940年は「昭和15年事務報告書」同398-399頁、1941年は「昭和16年事務報告書」同437頁、1942-1943年は「昭和18年事務報告書」同480頁、1944年は「昭和19年事務報告書」同507頁より、筆者作成

ことは当時天津にいる日本人は中国に多大の関心があったことがうかがえる。その他、日本に関する小説などの文学作品も多数保存されていた。

欧文献の蔵書は1,500冊で、多いとは言えないが、「日本問題を研究する歴史的資料として一定の価値がある」と指摘されていた<sup>21</sup>。内容としては、「地方歴史資料」、「満鉄資料」、「中国近代史研究資料」、「日本歴史文献」、「貴重な版本」に分けていた<sup>22</sup>。同館の購入した図書、寄贈された図書において、日本語文献を中心としていたが、欧文献はどのように同館の蔵書になったのか。次の事例から判断するに、1942年10月「軍管理図書整理委員会」が設置され、1943年3月軍管理図書整理委員会は同館を囑託し、天津の英国工部局図書館、天津倶楽部図書館、東方図書館の蔵書、合計44,000冊を整理し、収容することとなった<sup>23</sup>。同館の所蔵した欧文献は上述の図書館から接収した可能性があると考えられる。

### 3. 天津日本図書館の社会教育

読書は人々が新たな知識や価値観と出会う重要契機の一つとなった。図書館は社会教育の主要施設である。1988年の社会教育審議会社会教育施設文科会中間報告は、図書館に「生涯学習の中核的施設」といった位置づけを与えた。しかし、図書館は社会教育における位置づけは戦後だけではなく、すでに戦前から、提唱されてきていた。中田邦造は、社会教育の中核は自己教育であるという。また、自己教育の「もっとも有効なる方法は読書」であり<sup>24</sup>、読書の対象である図書は、教育的にみれば、「我々にとってまさに最良の教師」であり、「もっとも優れた全人教育者」である<sup>25</sup>と述べている。

天津日本図書館は天津に在住した日本人の社会文化施設として、広く利用されていた。本章では、天津日本図書館の諸活動の展開を考察し、同館が如何なる社会教育の役割を担っていたのかについて検討したい。

#### 3.1 日本を理解する場

天津日本図書館は日本居留民に広く使われていた。同館の利用者数と日本居留民数の割合は表5の通りである。日本居留民の増加に伴い、年間の利用者数が増えていくのみならず、一人当たりの利用回数も増加の傾向があったことが分かった。例えば、1932年日本居留民は平均年間に11.5回の利用者数であった。

表5 天津日本図書館の年間利用状況（1925年-1935年）

	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935
利用者数	18,466	21,228	24,318	22,214	31,137	46,828	48,505	76,539	59,793	59,518	70,732
日本人数	5,024	5,664	5,861	6,053	6,401	6,642	6,519	6,682	6,824	7,071	7,836
一人当たりの利用回数	3.7	3.8	4.1	3.7	4.9	7.1	7.4	11.5	8.8	8.4	9.0

出典：『天津居留民団30周年創立記念誌』484頁、1925年から1935年同館の事務報告書より、筆者作成

また、利用者はどのように同館を利用したか。分野別に考察すると、同館の1932年の入館者利用状況統計によれば、「入館者中四割は新聞雑誌閲覧者にして一名当たり読書率1.5冊之を在邦人六千人として対照せんに一名一ヵ年二十回登館し、内四回は新聞雑誌に楽しみあと六回に亘って九冊の図書に楽しむ事となる」<sup>26</sup>、「部門別に見れば第一位は断然文学及語学第二位は支那関係、第三位は児童にして一万冊突破」<sup>27</sup>したが分かった。ようするに、利用者は図書館を通して、新聞雑誌の閲覧、及び小説の鑑賞を中心に利用していたことがわかる。

1935年に同館に所蔵した新聞雑誌リストは表6と表7に示した。

新聞類は69種類で、そのうち日本語新聞は55種、中国語新聞は4種、英語新聞は4種、満文新聞は5種、韓国語は1種である。所蔵新聞には、日本各地の新聞だけではなく、中国各地、及び朝鮮、台湾などの日本植民地の新聞もあった。なお、天理教や人類愛善教などの宗教団体の支部は天津において設置されたため、宗教関係の新聞なども収集されていた。

雑誌類は合計112種類、そのうち日本語雑誌は104種、中国語雑誌は5種、英語雑誌は2種、朝



表6 天津日本図書館所蔵の新聞（1935年12月）

【支那関係】			
津報（中国語）	North China Star	北京新聞	京津日々新聞
益世報（中国語）	Peking & Tientsin Times	上海日報	青島新報
山海関公報（中国語）	新支那	山海関日報	天津経済新報
大公報（中国語）	天津日報	漢口日々新聞	
【満州方面】			
泰東日報（満文）	盛京時報（満文）	奉天毎日新聞	満州日々新聞
三江報（満文）	Manchuria Daily News	満州新報	
【関東方面】			
中外商業新報	帝国今夕新聞	東京朝日新聞	万朝報
横浜貿易新報	読売新聞		
【東北方面】			
秋田魁新聞	いばらき	信濃毎日新聞	上毛新聞
福島民報	北越新報	北陸タイムス	
【関西方面】			
大阪朝日新聞	大阪毎日新聞	神戸又新日報	京都日出新聞
名古屋新聞	名古屋毎日新聞	伊勢新聞	
【九州方面】			
大分新聞	九州新聞	徳島毎日新聞	福岡日々新聞
【朝鮮、台湾方面】			
東亜日報（朝鮮語）	釜山日報	京城日報	台湾新聞
【雑其他新聞室備附】			
人類愛善新聞	天理時報	天理時報（満州文）	天理時報（英仏独文）
経国新聞	聚訓主義	薬石新報	朝鮮水産新聞
天津商工会議所時報	正金週報	大阪小問物報	青果実報
東京小問物報	官報	外務省通商局日報	満州国政府公報（日満文）
アサヒグラフ	アサヒスポーツ	サンデー毎日	

出典：『天津日本図書館館報』改版第1号（昭和10年12月15日発行）より、筆者作成

表7 天津日本図書館所蔵の雑誌（1935年12月）

【支那関係】			
北支那公論	支那	支那問題	支那時報
東方公論支那研究	東亜	紫竹林	若人の群
太平洋（中国語）	燕京大学館報（中国語）	知識往来（中国語）	新民（中国語）
【満州関係】			
日満経済	満州評論	満蒙	旅行満州

【図書関係】			
アラベスク	学灯	書香（大連）	研究社月報
書物展望	字紙蓑	図書館雑誌	中華図書館協会報
図書月報	図書館研究	東京堂月報	東京市図書館と其事業文献報
朝鮮之図書館（朝鮮語）	（其他内地各図書館報省略）		
【歴史科学関係】			
朝鮮			
【社会科学関係】			
我親	外交時報	大亜細亜主義	国際知識
国際事情	世界知識	日本と世界	労働
ダイヤモンド	日本評論	中外財界	実業之日本
実業之世界	海外経済事情	改造	中央公論
日本及日本人	サラリーマン	社会教育	早稲田学報
学士会月報			
【自然科学関係】			
科学図報	医薬評論（中国語）	大調和	同仁
同仁医学			
【工芸関係及家政】			
工学	工業雑誌	プラスチック工業	科学と工業
主婦之友	新興婦人	婦人倶楽部	婦人公論
婦人界			
【産業関係及交通】			
計量界	東洋貿易研究	東洋貿易時報	養蜂界
薬水	朝鮮之水産	旅	ツーリスト
汽車時間表	海	海の族	NIPPON
【語学】			
一年の英語	ニッポン	Verda Mondo	ヤニ・ヤボン・モフビリー
【美術関係及体育】			
ベースボール	野球界		
【文学関係其他】			
キング	日の出	現代	講談倶楽部
雄辯	文芸春秋	吾妹	
【児童関係】			
コドモ、アサヒ	コドモノクニ	セウガク一年生	セイガク二年生
セイガク三年生	コドモノ新聞週報	小学四年生	小学五年生
小学六年生	少年倶楽部	少女倶楽部	子供の科学
少年赤十字	受験と小学生	面白い理科	科学の日本
小学生新聞（東京）	小学生新聞（大連）		

出典：『天津日本図書館報』改版第1号（昭和10年12月15日発行）より、筆者作成

鮮語雑誌は1種である。所蔵雑誌のジャンルからすれば、主に図書館関係、人文科学、自然科学、児童関係が分けられる。雑誌の種類及びその内容は豊富だったと言えよう。

以上のように、同館には日本出版の新聞雑誌のみならず、満州、「北支」、朝鮮などの出版物も収録されていた。当時、「外地」の天津にいる日本人にとって、日本の印刷物の入手が困難なので、図書館で日本の時事を把握することができたと考えられる。

### 3.2 生涯教育の場

天津の日本居留民の子弟は、当時学校卒業後、天津で就職する人が多かった。1935年以前では、天津において日本人を対象とした中等教育機関はまだなかったが、尋常小学校や高等小学校を卒業した日本人にとってさらに学習や研究の場が少なかった。天津日本図書館は巡回文庫の開設によって、青年たちに学び続けられる場を提供した。

日本人は天津の日本租界及びその周辺を中心に移住していたが、日中戦争勃発後、天津の日本居留民が急増したことに伴い、居留民の移住範囲も拡大されることになった。したがって、図書館の利用にあたって、日本租界の近くに暮らしていた人々にとっては便利であったが、一方、日本租界から離れた郊外や、河北省にいる日本人は図書館に通うことは不便であった。同館は、多くの人々に図書館を利用してもらえるように、巡回文庫の発足を促した<sup>28</sup>。

巡回文庫は約50名以上のメンバーを集める官公衙、学校、会社などを一単位とし、それに一箇所一文庫ずつを巡回させ、読書を奨励するという趣旨で設置したものである。文庫の書籍は「専門に亘らない常識涵養に資する種類の書物」<sup>29</sup>を中心に配置された。

1940年9月、同館の第2回図書館評議員会において、同館の「巡回文庫規定及び巡回文庫取り扱い細則」の商議を得て、居留民団に巡回文庫費の臨時予算案を提出した<sup>30</sup>。巡回文庫に関して、北京興亜院は同年12月中旬、巡回文庫用図書として約400冊を寄贈した。

「天津日本図書館館則」（1939年4月21日制定、1941年8月1日改正）に、「巡回文庫」に関して、以下のように規定されていた<sup>31</sup>。

- 第三十九条 巡回文庫（以下単に文庫と称す）は官公衙、学校、会社及各種団体（以下単に団体と称す）に之を廻附して所属員の閲覧に供す
- 第四十条 文庫の廻附を希望する団体は所定の様式に據り、図書館長に申出てその承認を受くべし
- 第四十一条 文庫閲覧料に付き二十圓とす但し居留民団長に於いて特別に必要ありと認めたる団体に対しては閲覧料を減免することを得
- 第四十二条 文庫の据置期間は二箇月以内とす

以上の内容から、巡回文庫は団体の希望に従い、同館が2ヵ月を期限にし設置したのである。文庫の図書は50冊前後を一文庫として編成する<sup>32</sup>。

1941年7月の天津居留民団第59次臨時民会において、「巡回文庫閲覧料徴収條例」が決議され、7月21日より巡回文庫設置の申し込み募集を開始した。第1、第2巡回区において計12箇所の文

庫停留所<sup>33</sup>が決定された。8月1日より文庫の発送を開始した。同年11月22日、春日、三笠、大和、吉野各国民学校よりそれぞれの関係者と児童巡回文庫関係者の打ち合わせ会を開催した。その結果、前述した4校は児童巡回文庫を編成し、12月より発送を開始する<sup>34</sup>。

巡回文庫の利用状況については、表8に示したように、1943年12月末までに、文庫停留所合計18個が設けられ、1つの停留所に1回限りの利用もあれば、数回の利用もある。2ヵ月を単位とした巡回回数からすれば、すでに113回に達した。また、一つの停留所に所属する人数は原則として50人以上の組織を規定していたが、50人未満の少人数のところ巡回文庫を設置する場合もあった。表8の分析から、所属人数は閲覧人数に対し、一人当たり2.5回以上巡回文庫を利用することがわかった。

表8 巡回文庫停留所及び閲覧利用状況（1943年12月末まで）

文庫停留所名	廻附回数	廻附冊数	閲覧人数	停留所所属人員
華北交易統制協会天津支部	6	327	538	80
北支石油協会天津支部	4	267	173	38
鐘紡公大七廠	3	158	160	130
華北○業 <sup>35</sup>	3	164	180	120
東亜海運	5	326	305	40
双喜紡織	9	491	916	140
華北運輸	12	651	834	80
東洋製紙	6	326	474	30
日本綿花	6	335	229	46
華北電業	6	336	633	70
正華洋行	6	326	261	15
福昌公司	6	324	423	75
日本文化協会	1	68	68	
平川部隊	6	351	716	
河北第一区	1	55	500	1,460
春日国民学校	12	649	1,107	256
三笠国民学校	12	652	96	500
吉野国民学校	10	537	592	505
計	113	6,342	9,172	3,583

出典：「昭和18年事務報告書」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）477頁より、筆者作成

以上のように、天津日本図書館は巡回文庫の開設を通して、日本の企業や軍隊、学校などを対象に開いたのである。その結果、巡回文庫は居留民にとって学び続けられる場であり、生涯教育としての役割を担っていた。

### 3.3 日本居留民どうし交流の場

天津日本図書館は展覧会、講演会、座談会などの諸活動を開催し、天津の日本居留民に交流を

促す場を提供した。

### (1) 日本郷土資料収集

同館の一大特色としては、中国各地の地方誌を収集することであった。一方、「外地」にある図書館として、「日本文化発揚の使命」<sup>36</sup>といった戦時下の役割も担っていた。1941年に、同館創立35周年を記念するために、その役割の一つとして日本郷土資料収集の計画を立て、同年6月より収集作業を着手した。天津居留民たちは活動に応えた。特に天津の石川県婦人会、秋田県婦人会より購入費諸経費、及び図書の寄贈を受けた。また日本内地からの寄贈も多かったという。1941年年末までに、日本の27府県の郷土資料、合計で150余冊を受けた<sup>37</sup>。

### (2) 日露戦役資料展覧会

1940年は日露戦争35周年であったため、同館は日露戦役資料展覧会を3月10日に開催した<sup>38</sup>。展示品は同館所蔵の同戦争関係図書約120点、戦争出征者及び一般従軍記、図画典籍、写真帳、絵葉書などの特別出品物100余点である。開催日当日の入場者は900名で、また中等学校側の要望により、翌11日にも開催された。各学校生徒の参観者は約600名で、参加者全体としては1,500名に達した。

### (3) 天津読書会

天津読書会は1940年11月1日に天津日本図書館の助成事業の一つとして設立したものである。会長1名、幹事長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名を設けた。初代会長は同館の評議員である三角武雄で、幹事長は木下権四朗である<sup>39</sup>。1941年の会員数は247名であった<sup>40</sup>。

また、1940年から1941年の読書会活動として合計で講演会13回、座談会1回が実施された。講演会の内容及び講演者は以下の通りである<sup>41</sup>。

- 第1回 天津読書会会長 三角武雄 「白河今昔物語」
- 第2回 北京 小林徳 「黄河河源と崑崙山脈」(黄河研究第1回)
- 第3回 庸報社長 大矢信彦 「支那小説概説」
- 第4回 大阪府立貿易館 井岡大輔 「支那の中心思想四神に就いて」
- 第5回 文学博士 佐久間鼎 「日本語の構造に就いて」
- 第6回 天津日本図書館館長 中野義照 「支那の宗教(第1章)」
- 第7回 北京 小林徳 「黄河百害唯富一套」(黄河研究第2回)
- 第8回 庸報社長 大矢信彦 「地域的に見たる三国誌」
- 第9回 日本駐天津総領事 加藤三郎 「バルカン近東の情勢に就いて」
- 第10回 天津日本図書館館長 中野義照 「支那の宗教(第2章)」
- 第11回 天津 牧尚一 「北支事変と居留地の沿革」
- 第12回 文学博士 常盤大定 「支那仏教に就いて」
- 第13回 新民印書館 安藤更生 「仏教美術概論」

以上のように、読書会に開催された講演会は内容として、中国の歴史、地理、文学、宗教、思想を中心としたものであった。依頼された講演者は図書館館長、新聞社社長、領事、文学博士な



どの社会的に名を馳せた名士、知識人であることがわかった。なお、講演会について、講演集も発行された<sup>42</sup>。

#### (4) 河北省と山東省の地方誌展覧会

同館の蔵書収集には、特に中国の地方誌の収集に力が注がれた。劉（2000）は、同館の蔵書に関して、「中国地方誌も680巻あり」と言及している<sup>43</sup>。そのうち、中でも河北省を中心に「北支」各省の地方誌の収集に努めていた。1939年には、河北省地方誌の収集目標を達成できた際に、「河北省地方誌展覧会」を開催することに決定していた。具体的には、「第一部、中国全般に亘る地誌関係のもの；第二部、北支一般に亘る地誌関係のもの；第三部、河北省方志並に其地方の歴史、地理、経済、風俗等に関係あるもの」<sup>44</sup>に分けられる。1939年5月5日から7日まで陳列図書総数は450余冊、入場者は700余名に及んでいた。

1940年5月11日から13日の3日間、山東省地方誌展覧会を開催された<sup>45</sup>。展示品として、地方誌、関係図書、写真帳、地図等合計で300点があった。参観者は日中両国人を合わせて約800名に及んだ。そして、11日午後4時からは展覧会の関連イベントとして「講演と映画の夕」を公会堂で開催した。臼井居留民団長の「山東の人物」について、天津日本高等女学校小林倍一郎教諭の「山東の自然について」といった題名の講演が続き、「孔子聖廟大観」「嶗山大観」の映画が上映された。

同館の役割としては日本郷土資料収集、日露戦役資料展覧会などを通して、戦時下において日本精神を宣揚する効果があった。そして、天津読書会の講演会や座談会、中国の地方誌展覧会を通しての活動を生かし、中国の文化・歴史の理解を深める役割をも果たした。天津の日本居留民たちは、同館の諸活動への参加によって、互いに交流を深めることができたと考えられる。

### 3.4 学校教育の充実をはかる場

前述したように、天津日本図書館の評議員には、日本人経営の学校長などの教育関係者が多かった。そのことは同館が日常運営や開催した諸活動からも学校教育を補う役割を果たしていたのである。

同館は設置された直後から、児童生徒読者が多かった。居留民団各年度事務報告書では、1938年までに児童生徒読者の利用者数の統計データはないが、「館内／外借覧部門別統計」によれば、児童関係書籍の閲覧数が年間閲覧書の冊数総数の第三位を占めていた。その理由としては、天津日本租界には日本人向けの学校が設けられていたため、生徒利用者が多かったからと考えられる。

同館は児童生徒読者のために、1938年10月に児童図書室を設けた。だが、天津在留日本人の増加に伴い、閲覧児童数が徐々に増加し、「遂に収容室は甚だしき狭隘を感じるに至り」<sup>46</sup>、児童図書館としては独立経営の計画が打ち出されることになった。実際には児童図書館は1939年2月11日より開館され、児童生徒に対し何とか対象できるようになったし、特に読書指導係が設けられることにもなって、活動の環が広がっていた<sup>47</sup>。

「天津日本図書館館則」（昭和16年8月1日改正）によると、利用者に関しては、「第三十六条 登館者は小学程度の児童を本位とす」と規定されている。

表9 児童図書館学年別閲覧人員統計（1939年）

学年別	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	中学生	合計
利用者数	2,099	2,669	3,656	3,223	3,035	1,467	16,149

出典：「昭和14年事務報告書」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）362頁より、筆者作成

表9に示したように、児童図書館の利用者は4学年と5学年を中心とし、1割弱の中学生も利用したことが分かった。また、1939年天津日本図書館の利用者総数は33,191人、その内児童図書館を利用した児童数は16,149人で、5割弱を占めていた。天津の居留民児童において、児童図書館は子どもにとって重要な存在であったと言える。

表10 児童図書館各年度閲覧人員統計（1939年-1944年）

年度別	1939年	1940年	1941年	1942年	1943年	1944年
利用者数	16,149	19,667	16,106	10,630	10,689	9,793

出典：昭和14年から昭和19年の天津居留民団事務報告書より、筆者作成

1942年、太平洋戦争勃発後、児童図書館の利用者数は急速に減った。天津の諸学校には、戦時体制のため、勤労動員を実施するようになったからである。激変の社会情勢にもかかわらず、相当の児童生徒が児童図書館を利用したことが表10を通して分かった。

また、1943年7月1日から8月5日にかけての36日間で山海関臨海学校の夏季文庫設置期間中、同館が約1週間交代で出張し、文庫の設置、保管、閲覧事務を行い、児童の閲覧指導に携わっていた。

同館は、天津日本居留民団学務課と協力し、天津諸学校の児童生徒の組織化をはかった。その一つとして、合同博物採集活動を開催し、小動物、植物及び鉱物類を採集し標本作製させた。児童生徒の天然資源に対する知識が深まることを目的とした活動である。さらに、天津日本教育博物館の創立の際に、展示物の作成を目的としていた<sup>48</sup>。

#### 4. おわりに

本稿は社会教育の視点から天津日本図書館の諸教育活動を考察し、同館が如何なる役割を果たしたのかについて分析した。同館は40年間存続していた間に、天津の日本居留民に広く利用され、支持されていた。

同館は創立当初早稲田大学による寄贈書籍を受け、これを基礎にして設立された。評議員に学校関係者が多数いたため、同館は天津の日本人向けの諸学校と緊密な関係を持ち、学校教育の補足としての役目もあった。社会教育の視点から考察し、同館は天津において日本人にとって、日本を理解する場、生涯教育の場、日本居留民どうしの交流の場、学校教育の充実をはかる場であったことが明らかになった。

日本は戦前・戦中期に中国で創立した図書館としては天津日本図書館の他、南満州鉄道株式会社関係の図書館一大連図書館、奉天図書館、ハルビン図書館、及び「対支文化事業」としての北

京近代科学図書館、上海近代科学図書館などが挙げられる。

天津日本図書館は居留民団立の図書館であったのに対し、北京近代科学図書館や上海近代科学図書館は「対支文化事業」であり、管轄所属や経費出所、蔵書の種類、年間利用者などはそれぞれであった。例えば、天津日本図書館の利用者はほとんど日本人だが、北京近代科学図書館の利用者には中国人が半分以上占めていた。なぜなら、北京近代科学図書館は「対支文化事業」のゆえに、中国人に日本文化を紹介する機能が備わっていたが、天津日本図書館はあくまでも現地の日本人の研究、教養、娯楽に対する文化施設であったため、中国人利用者が少なかったからである。また、北京近代科学図書館は外務省文化事業部による経費をうけていたので、日本語教科書の編纂、及び經典著作の翻訳作業に携わっており、中国に日本文化を宣伝・紹介するという趣旨に基づき展開する活動として行われた。一方、天津日本図書館は天津日本居留民団の歳入及び天津の日本居留民の寄付によるものであったため、北京近代科学図書館のような文化活動を行うことが困難であったと考えられる。したがって、天津日本図書館は天津現地の日本居留民のために設立した通俗的、大衆向きの社会教育の文化施設であったと言える。

今後は、日本の「外地」における他の居留民団立の図書館との比較研究を通して、天津日本図書館の特徴を更に明らかにすることを課題として考察していきたい。

## 注

- 1 天津日本教育図書館は1942年に設置された社会教育施設である。年間参観者は20,000人以上達し、その内、8割が日本人生徒であり、他には教育者、軍隊関係者、会社員などもある。各種行事として、講演会、展覧会、研究会などが主催されており、例えば、1943年同館開館1周年を記念し、「第四回学術講演会—教育博物館開館一週年記念講演」、「花と生活展—本館開館一週年—」の系列活動が行われた。研究会は国民学校や中等学校の児童生徒を対象とし、科学実験の指導を行っていた。例えば、1943年に顕微鏡と望遠鏡の観察実践指導が実施し、参加者が天津の国民学校、中学校、青年学校にわたって1,356名であった。また、同館は資料収集に携わっていて、主として自然標本（昆虫標本、岩石標本、野生生態の写真資料）、民俗用品（大陸のおもちゃ、他国租界の警察衣装など）、模型である。
- 2 劉書彙（2000）「天津図書館における戦時天津日本図書館蔵書」『図書館雑誌』Vol. 94, No. 9、729頁-730頁、2000年；焦玫・孔方恩（2000）「天津図書館収蔵満鉄資料概況」62頁-63頁；焦玫（1998）「天津図書館日本文庫書目資料叢編評介」『日本学刊』1998年第1期、141頁-145頁。
- 3 「天津図書館日本文庫の紹介」『近きに在りて』第36号、116頁-119頁、1999年11月
- 4 「天津図書館日本文庫再訪記」『近きに在りて』第40号、68頁-71頁、2001年12月
- 5 「天津日本図書館について」『東洋文庫書報』第28号、73頁-90頁、1997年3月
- 6 「天津日本図書館—ある植民地図書館の歴史—」『図書館文化史研究』第17号、59頁-75頁、2000年
- 7 天津図書館編（1996）『天津日本図書館館史資料匯編』、天津社会科学院出版社
- 8 天津居留民団（1930）、『天津居留民団二十周年記念誌』、天津居留民団
- 9 「清国天津に於ける日本図書館」早稲田学報第124号、1905年10月
- 10 「明治四十一年民団事務報告」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（上冊）1頁
- 11 「明治四十三年民団事務報告」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（上冊）19頁

- 12 前掲「清国天津に於ける日本図書館」
- 13 「明治四十四年民団事務報告」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（上冊）27頁
- 14 「明治四十四年民団事務報告」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（上冊）23頁
- 15 「大正五年民団事務報告」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（上冊）56頁
- 16 「大正十五年民団事務報告」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（上冊）121頁
- 17 前掲論文「天津日本図書館—ある植民地図書館の歴史—」62頁
- 18 前掲論文山根（1997）、76-77頁
- 19 劉書匯「天津図書館における戦時天津日本図書館蔵書」、『図書館雑誌』Vol. 94, No. 9、2000年、729頁-731頁
- 20 前掲論文劉書匯（2000）、729頁
- 21 前掲論文劉（2000）、730頁
- 22 前掲論文劉（2000）、730-731頁
- 23 「図書館概況（昭和18年）」、前掲書『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）474頁
- 24 中田邦造『公共図書館の使命』（復刻図書館学古典資料集）日本図書館協会1978年、「日常生活における読書の意義 四 読書の功德」9頁
- 25 前掲書「七書斎と図書館」18頁
- 26 「天津日本図書館昭和七年事務報告」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）241頁
- 27 同上、242頁
- 28 「天津日本図書館巡回文庫閲覧料徴収条例案」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）456-457頁
- 29 同上
- 30 「図書館概況（昭和15年）」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）398頁
- 31 「天津日本図書館館則（昭和14年）」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）392頁
- 32 「天津日本図書館巡回文庫取扱細則」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）459頁
- 33 文庫停留所名は双喜紡織、華北運輸（2箇所）、東洋製紙、華北電業、北支自動車、福昌公司、塘沽運輸、三昌洋行、日本綿花、天津輸配組合、鐘紡公大七廠、〇〇部隊、大和、三笠、吉野、春日各国民学校
- 34 「図書館概況（昭和16年）」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）435-436頁
- 35 ○は読み取り不可、以下同
- 36 同上
- 37 同上
- 38 前掲「図書館概況（昭和15年）」
- 39 同上
- 40 同上
- 41 同上
- 42 第4回、第6回、第10回、第11回に関する講演集が発行された。
- 43 前掲論文劉書匯（2000）、729頁
- 44 「図書館概況（昭和14年）」、前掲『天津日本図書館館史資料匯編』（下冊）351頁
- 45 前掲「図書館概況（昭和15年）」
- 46 前掲「図書館概況（昭和14年）」
- 47 同上
- 48 同上

